

令和2年度 北海道開発局 優良工事等表彰を受賞

北海道開発技術センターは、今年度も北海道開発局優良工事等表彰を受賞しました。業務名は以下の通りです。いただきました評価に恥じないよう、今後もみなさまの信頼と満足を得るために、職員一同、より良い成果品とサービスを提供してまいります。引き続きご指導のほど、宜しくお願い申し上げます。

◆北海道開発局長表彰:

札幌開発建設部管内
ほっかいどう学みち学習検討業務(札幌開発建設部)

◆開発建設部長表彰:

小樽開発建設部管内
協働型道路管理検討業務(小樽開発建設部)

帯広開発建設部管内
地域協働型道路管理検討業務(帯広開発建設部)

写真3:北海道開発局長表彰の受賞者(前列左:山口理事長、前列右:大井上席研究員)
写真4:小樽開発建設部長より表彰を受ける越後次長
写真5:帯広開発建設部長より表彰を受ける大川戸部長



写真1:北海道開発局
倉内局長より表彰を受ける
山口理事長
写真2:大井上席研究員

第20回「野生生物と交通」研究発表会のお知らせ《予告》

notice

第20回「野生生物と交通」研究発表会を札幌市で開催いたします。
野生生物と交通に関心を持つ多くの方のお申込み、ご参加をお待ちしております。
詳しくは、ウェブサイト <http://www.wildlife-traffic.jp/> をご覧ください。

◆開催日: 2021年2月15日(月)

◆会場: 札幌市コンベンションセンター
(札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1)

◆論文発表: 無料[締切: 2020年12月4日(金)]

◆パネル展示: 無料[締切: 2021年1月12日(火)]

◆聴講: 無料[締切: 2021年2月5日(金)]

※今年度は、人数制限を設けた上での完全申込制となります。

◆講演論文集: 2,500円(開催当日発売)[予約: 2021年2月5日(金)]

◆申込方法: 「野生生物と交通」ウェブサイトよりお申し込みください。

※近日中に申込フォームを公開いたします。

お申込み・お問合せ: (一社)北海道開発技術センター「野生生物と交通」研究発表会担当係(担当: 鹿野・向井)

TEL: 011-738-3363 FAX: 011-738-1890

E-mail: wildlife@decnet.or.jp ウェブサイト: <http://www.wildlife-traffic.jp/>



「野生生物と交通」ウェブサイト

当センター主催のシンポジウム、研究発表会等の開催にあたっては新型コロナウイルス感染症対策を講じます。
状況によりオンライン開催等に変更する場合があります。予めご了承下さい。

編集後記 坪井さんのお話にもありました、世界文化遺産候補にわが故郷、伊達市が入りました! 貝塚が発見されたのは私が小学生の頃(たぶん)で、当時は「へーそうなんだー」程度にしか思っていませんでしたが、このような大きな事になるとは夢にも思っていませんでした。実家から車で10分弱という距離なので、帰省した際には行ってみたいと思います(まだ行ったことがない...)。加えて、伊達市と当別町が、共に開拓150年の節目を迎えたことから、今年10月に歴史兄弟都市協約が締結されました。当別町のお仕事もさせていただいているご縁で、当別町の広報誌で4コマ漫画の募集があり応募したところ入選となり、11月号の広報誌に掲載予定とのこと。歴史に絡めた内容となっていますので、機会があればご覧ください(当別町HPからもご覧いただけます!)。(M.K)

dec monthly vol.422

2020年11月1日発行

発行人 山口 登美男

発行所 一般財団法人 北海道開発技術センター

TEL (011) 738-3363 FAX (011) 738-1889

URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_info01@decnet.or.jp

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2020.11.1 vol.422 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンスリートピック)

シーニックバイウェイ北海道と日本遺産

● dec Report (デックリポート)

dec地域政策研究所セミナー

『withコロナ時代』のアウトドアツーリズムオンラインセミナー

dec Interview >>> 一般財団法人道南歴史文化振興財団 事業課長 坪井 睦美 氏

2021年の世界文化遺産登録が期待される「北海道・北東北の縄文遺跡群」。北海道を代表する縄文文化の発信拠点である函館市縄文文化交流センターを訪れ、南茅部地域で32年にわたり遺跡発掘に携わってこられた坪井睦美さんに「縄文」への思いをお聞きました。

32年前、たまたま南茅部町埋蔵文化財調査団の発掘作業員募集に応募されたことが、長くて深い縄文文化とのかわりの発端だそうです。

私は旧南茅部町生まれで、専業主婦をしていたのですが、子育てが一段落した30代半ばに「発掘作業員募集」を知って応募したのです。縄文や遺跡に関する知識は特に無いまに、土日は休みだから子どもたちの休みに家に居られると思ったのが応募のきっかけでした。

ところが、実際に発掘作業にかかり始めると、自分が生まれ育った南茅部にこんなに素晴らしい縄文文化が栄えていたのだ、ということがわかり、大きな衝撃を受け、それからどんどん「縄文」にハマっていきました。

そうしているうちに、調査団の上司から大学に行って学芸員の資格を取ったらどうか、とすすめられたのです。私は家庭の事情で高校へ進学できず、それを悔しく思っていたから、大検を受けて大学進学ができると聞いて、すぐ挑戦を決めました。半年、通信教育で勉強し、大検合格。43歳のときのことで、発掘作業と家事の合間の受験勉強

で大変でしたが、勉強することに慣れていたので、本当に楽しかった。その後、玉川大学の通信教育を受けて少しずつ単位をとり、50代で学芸員の資格を取りました。同僚たちが、ずっと応援してくれて恵まれていたと思います。

発掘作業員としては、南茅部地区を縦断する国道278号尾札部道路の整備に伴う遺跡発掘調査に従事してきましたが、世界文化遺産候補の「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成遺跡である大船遺跡と垣ノ島遺跡の両方の発掘にかかわることができたのは、本当にラッキーだったと思っています。

2011年に函館市縄文文化交流センターがオープンし、その施設管理・運営を担う財団の職員として縄文文化の普及啓発事業に打ち込んでおられます。その原動力は何でしょうか。

私の場合は、まず土器の魅力があります。発掘していると土器がたくさん出土しますが、どうやって作ったのだろう、自分でも作ってみたい、と強く引きつけられました。

それから、1996年ごろに青森市の三内丸山遺跡が全国的に脚光を浴びていました。ちょうどそのときに大船遺跡の発掘作業をしていたのですが、大船遺跡も三内丸山に匹敵する大規模で重要な遺跡だと大きく報道され、遺跡の重要性をあらためて実感したのです。地元の人たちにもぜひ、その重要性を伝えたいと思い、縄文文化の普及活動に力を入れるようになりました。

縄文遺跡の発掘、解明の背景には、道路整備などの開発事業において文化財保存に対する理解があったことが大きいと感じています。「縄文」を軸に、人をつなぎ、道をつないでいきたい。

dec Interview

つばい むつみ 1954年南茅部町(現・函館市)生まれ。89年南茅部町埋蔵文化財調査団の発掘作業員に。同調査団を前身とするNPO法人函館市埋蔵文化財事業団(2005年発足)、さらにこれを母体に15年に設立された一般財団法人道南歴史文化振興財団に勤務。発掘作業の傍ら玉川大学(通信教育)で学び、11年学芸員資格取得。同財団が指定管理者となっている函館市縄文文化交流センターで縄文文化の普及啓発事業などに携わる。趣味は土器づくりと山菜とり。

その最初の取り組みが98年に発掘作業員の仲間で作った「北の縄文CLUB」です。初代事務局長を務め、土器づくり大会を開催するなど縄文文化に親しんでもらう活動を始めました。やがて道外の人も参加するなどCLUBの活動の輪は広がりました。現在もCLUBは私たちの財団に事務局を置いて普及活動を行っています。

南茅部町埋蔵文化財調査団は、町が函館市と合併したのを機にNPO法人函館市埋蔵文化財事業団(2005年発足)となり、この組織を母体として2015年に設立されたのが現在の財団で、函館市縄文文化交流センターと史跡大船遺跡の施設管理・運営を担っています。

現在の私は発掘現場の管理、指揮とセンターの普及活動の両方に携わっています。センターではイベントや体験学習などの事業計画を組み立てる仕事ですが、たまに展示解説のご指名を受けることもあります。私自身が発掘にかかわった展示物が多いので、なるべく発掘したときのエピソードも紹介するようにしています。

函館市縄文文化交流センターが収蔵・展示する国宝「中空土偶」(愛称:茅空(カックウ))は縄文文化のシンボルとして世界に知られるようになりました。縄文文化をめぐる国際交流も活発になっているようです。

カックウは、1975年に地元の主婦によりジャガイモ畑で偶然、発見されました。これまでベルギー王立博物館、米国スミソニアン博物館、大英博物館、パリ日本文化会館などに「海外出張」しています。私も「追っかけ」でロンドンやパリに出かけ、海外での縄文文化に対する関心の高まりを実感することができました。

海外で縄文が関心を持たれる大きな理由は、漁労・狩猟・採集の時期が1万年以上も長く続いたことにあります。これは世界の先史時代では例を見ないことで、日本以外では早い時期に農耕畜牧が定着し、その後も数千年程度の短い間隔で歴史は変わっていきました。ですから1万年以上続いた縄文時代とは、一体どのような文化を持ってい

るのだろう、という強い興味と諸外国で持たれているのです。

ドイツ考古学研究所との学術交流は、すでにNPO法人函館市埋蔵文化財事業団のころに始まります。2004～5年に文化庁主導で「日本の考古―曙光の時代」という日本文化を紹介する展覧会がドイツで開催されたのですが、それがきっかけで、ドイツの学生の発掘研修が日本で行われることになり、文化庁が函館市に依頼し、事業団が受け入れたのです。学生は白尻小学校遺跡の発掘調査に参加し、帰国後、ドイツ国内で成果を発表。それをドイツ外務省の直属機関であるドイツ考古学研究所が目し、08年に事業団と縄文文化に関する共同研究の協定を締結しました。

11年10月には函館山山頂のクレモナホールで国際シンポジウム「縄文文化とユーラシアの様相」(主催:NPO法人函館市埋蔵文化財事業団、ドイツ考古学研究所、ベルリン日独センター)が2日間にわたって開催されました。日独交流150周年と縄文文化交流センター開館記念を兼ねた催しで、ドイツ、英国、米国など国内外の研究者20名を講演者、パネリストに迎え、延べ約240名の一般市民が聴講した盛大な交流の場となりました。



国際シンポジウムでの市民との交流

今年2月にベルリンで開催された「ドキュメンタリー映画『北海道の世界』上映とパネルディスカッション」(主催:ベルリン日独センター、協力:ドイツ考古学研究所、北海道環境生活部文化振興課縄文世界遺産推進室)では、パネリストとして参加されています。



国宝「中空土偶」(愛称:茅空(カックウ))

このとき公開されたドキュメンタリー映画は、ドイツ考古学研究所のマイケ・ワグナー博士の監督により、これまでの学術交流や取材をもとに製作されたもので、縄文文化をはじめ北海道の文化史を考古学的視点で紹介する内容です。

パネルディスカッションでは、日本側から縄文文化の普及啓発や国際的な発信に長く尽力されてきた阿部千春氏(道庁縄文世界遺産推進室・特別研究員)と私が参加し、私は縄文土器の模様を研究しているということで、縄を実際に燃やして模様をつける実演を披露しました。

このような国際交流について振り返ってみると、南茅部に生まれ育ち、どこにも移り住んだことのない私が、海外に出かけたり、地元で海外からさまざまな人を迎え、知り合うことができたのは、まさに縄文文化に携わったおかげです。このような人のつながりは私にとって宝物であり、縄文なくして、今の私はないのではないかとさえ感じています。

函館市縄文文化交流センターは道の駅「縄文ロマン南かやべ」と隣接して国道278号沿いに立地し、シーニックバイウェイ北海道「函館・大沼・噴火湾ルート」(2006年指定)の目玉観光スポットです。

私は、道を通じて各地の美しい景観や文化をつなぎ、まちづくりに役立てるというシーニックバイウェイの趣旨に大いに共感し、ルート立ち上げのころから活動に参加してきました。現在は(一財)道南歴史文化振興財団がルートの活動団体として参画し、「シーニックの日」(国道沿道の清掃や花苗の植栽など)や「シーニックdeナイト」などのイベントに協力してきました。センターや道の駅はシーニックバイウェイの地域の活動拠点なのです。

今後、縄文文化の普及を進める上でもシーニックバイウェイはとても大事だと思っています。というのは、私たちのルートだけでなく、「支笏洞爺ニセコルート」の沿道には、世界文化遺産候補の構成遺跡である北黄金貝塚(伊達市)や入江・高砂貝塚(洞爺湖町)があります。さらにルート間で連携し、シーニックバイウェイの活動として「縄文」を盛り立てて、広域で強力に発信できればいいですね。

東北の縄文遺跡の関連の方々とも連携を深めようと、以前、青森県の日本風景街道の活動で縄文にかかわっている方々を訪ねたことがありました。縄文を軸に、道内や東北の各地とより広くつながっていくことができればと願っています。



道の駅「縄文ロマン南かやべ」に隣接した函館市縄文文化交流センター(手前)



眼下に太平洋を望む縄文時代の竪穴式住居(大船遺跡)



dec地域政策研究セミナー「新幹線がつくる新しい『北の縄文交流』の時代」(2013年開催)

縄文文化に魅せられた30年以上の取り組みが世界文化遺産候補につながったことは素晴らしいことです。来夏の決定が待ち遠しいですね。

自分が発掘にかかわった遺跡が世界文化遺産に登録されたら、本当に感慨無量です。ただ、それが着地点ではなく、これまで以上に縄文文化を知ってもらい活動に取り組んでいかなければならないと思っています。例えば、センターの体験学習メニューを増やしたり、外国人対応のための英語による解説サービスなども整えていく必要があります。

振り返れば、世界文化遺産候補となるほどに縄文遺跡の調査が進み、縄文文化が解明されてきた背景には、道路

整備など北海道開発に携わる行政や事業者の方々のなかに埋蔵文化財を守ろうという理解があるからだと思っています。例えば、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の関連遺産の一つで、森町にある鷺ノ木遺跡のストーンサークルは、保存のために高速道路にトンネルが掘られました。それも遺跡を損なわないように手作業を含む細心の注意で工事が行われたということです。

北海道開発局の研修で若い職員が発掘現場を見学に来られることがあります。私はそのときにこうお話ししています。「開発事業と文化財保護は一見すると反対のようですが、開発があったからこそ、世界遺産候補になるような重要な遺跡や貴重な遺物が発見され、守られた。これは凄いことです」と。実際、私は30年余り、それを痛感しながら発掘に携わってきました。

開発によって整備された道路も、その道路を地域づくりのために活用するシーニックバイウェイ北海道の活動も、どちらも今後の縄文文化の普及に大いに繋がっていくものだと確信しています。



「みんなてめぞう世界遺産!!」パネルの前で



趣のある街並みを花嫁行列が歩く。江差いにしえ街道「花嫁行列」

寄稿
01

「江差の五月は江戸にもない」 —歴史を生かした町づくり・道づくり—

どうなん・追分シーニックバイウェイルート 副会長
江差いにしえ資源研究会 代表 室谷 元男 氏

北海道の南西部日本海に面した江差町はニシンやヒノキアスナロ材による北前船交易で栄えた港町です。その繁栄ぶりは「出船三千、入船三千」「江差の五月は江戸にもない」と謳われています。江差の街並みには寺社仏閣・商家や民家などの建物が遺されています。また、日本を代表する江差追分をはじめ、お祭りや郷土芸能などは、多くの先人たちが北前船に乗せて運んで来しました。言い換えれば江差の町は北前船がつくった町なのです。

しかし輸送手段が海から陸へと変遷し、そして海からニシンが姿を消して、過疎の町になって行きました。そんな折昭和61年に江差の若者の発案で、淡路島から瀬戸内海を抜けて日本海を北上。50日をかけて昭和の北前船の大回航がなされました。この北前船大回航が自分たちの足元の歴史に眼向け、歴史を生かす町づくりへのきっかけとなりました。

そして平成元年に北海道の戦略プロジェクト「歴史を生かす町づくり」のモデル地区の指定を受けました。この事業に呼応して江差歴まち商店街組合が結成されました。商店街活動は北前の息づく商店街づくりをキーポリシーに、ヒューマンスケールの町づくりを目指すこととしました。一方、戦略プロジェクトは、街路延長が約1.1km、7mの道幅を両側3mの歩道をつける街路事業が導入されることになりました。この

計画と並行して、「こんなマチに僕らはしたい」をテーマに掲げ、いにしえ街道を使った「いにしえ夢街道」と銘打った数々のイベントを展開しました。

幕末に江差沖で沈んだ幕府の旗艦・開陽丸をテーマにした野外劇・江差幕末物語。歴史をテーマにした仮装大会などなど、自分たちの住みたいマチをつくろうとの思いでした。初めて江差幕末物語の野外劇で私が榎本武揚を演じた時、自分が立つこの道のアスファルトの下には自分が演じた榎本武揚や土方歳三の足跡が遺っている、そんなことを感じました。先人の足跡の上に自分たちが立っている。シーニックバイウェイの活動を通して、全道の方々とお話をして、過去から続くこの道を私たちがどう次の世代に渡すのか？それを考えるのが大切だと感じました。

その後、いにしえ夢街道では「花嫁行列」や200組ものおひな様を飾った「北前のひな語り」のイベントに発展。ニシンの繁栄が息づく町として江差町が平成29年4月に「日本遺産」に認定されました。もしかしたら私たちの活動がその役に立ったのかも知れません。

私は「町づくりは、しみ込みの運動」だと思っています。過去からの先人の思いを、次代へどうつないで行くのか？先人たちが歩いた町、この道に、現在の私たちの思いをどうしみ込ませて行けるのかと思案しています。

北海道日本遺産とシーニックバイウェイ

北海道には認定された日本遺産が4か所あり、いずれも、シーニックバイウェイ北海道の指定ルートや候補ルートのエリア内となっています。そこで、道内の日本遺産2か所について、シーニックバイウェイ北海道の活動を含め、ルートの方々にご紹介いただきました。



北前の歴史を伝える町歩き

寄稿
02

日本遺産「炭鉄港」にみる国策と交通ネットワーク形成

空知シーニックバイウェイ -体感未来道-
NPO法人炭鉄の記憶推進事業団 理事長

吉岡 宏高 氏

空知の石炭を軸に、小樽の港、室蘭の鉄、これら3地域を結ぶ鉄道という、近代日本を支えたストーリーが、昨年、日本遺産に選定されました。そのタイトルは、「本邦国策を北海道に観よ！～北の産業革命『炭鉄港』～」。日本遺産100件のうち最も硬派で、激動の歴史を直球勝負で表現したものとして異彩を放っています。

炭鉄港の源は、遠く離れた鹿児島にあります。薩摩藩11代藩主の島津斉彬(1809-1851)は、海外からの圧力に対抗するために、豊かな国民生活を基とした近代技術が必要であるとして、別邸の仙巖園内で、わが国初の西洋式近代工場である集成館事業を行いました。斉彬は家臣団たちに、蝦夷地は日本の宝蔵であり、ロシアに取られないために産業を興し人口を増やす必要性を訴えました。その後、薩摩藩士たちは明治政府で主要な地位に就きますが、なかでも北海道開拓のために設置された開拓使は、黒田清隆など斉彬の遺訓を受けた旧薩摩藩士たちが主体となりました。

開拓使が設置された1869(明治2)年の北海道人口は約5万人で、大半

が渡島半島と沿岸部に住んでいました。そこで内陸部の開発が急務とされ、その先陣を担ったのが幌内炭鉱(三笠市、1879年開鉱)でした。石炭搬出のための幌内鉄道が、1880年わが国3番目の鉄道として小樽市手宮～札幌間で部分開通。1882年には幌内まで全通し、労働力確保のために明治政府への反乱士族など国事犯が多く収監された空知集治監(監獄)が開設されました。

その後、空知集治監は、一年早く開設されていた樺戸集治監(月形町)とともに、道路開削の役割を担われます。その代表例が、三笠～旭川間88kmの上川道路です。1886年わずか三ヶ月で石狩平野を一直線に伸びる仮道路を全通させ、1889年に全線が完成しました。さらに旭川～網走間217kmの北見道路も、空知集治監と釧路集治監網走囚徒外役所(後の網走監獄)によって建設されました。

この北海道を横断する道路網は、三笠で幌内鉄道に接続しており、石炭輸送があり高輸送密度の小樽～三笠間は鉄道で、人口が少ない三笠～網走間は道路でという、モーダル



日本遺産の構成資産である樺戸集治監本庁舎、現在は月形樺戸博物館となっている

ミックス(交通手段の最適組み合わせ)の超先進事例と言えます。その鉄道・道路沿線の琴似・野幌・滝川・永山・湧別・端野などには、薩摩藩の外城制度をモデルにした半農半兵の屯田兵村が置かれました。なかでも、美唄付近に工兵・騎兵・砲兵という特務部隊がおかれたのは、炭鉄と集治監によって確保された交通ネットワークで自在に移動が可能だったからです。

空知のシーニックバイウェイは、上川道路を継承する国道12号を背骨にして、東側に石炭鉱業、西側に農業という、日本の近代化を支えてきた産業地帯を範囲にしており、多くの開拓歴史遺構が残されています。美唄～滝川間の国道の直線日本一区間29.2kmも、こうした歴史的背景の知識があって、はじめて真の意味を理解できることになるのです。ここに、ポスト・コロナ時代の観光の一つのヒントが隠されていると言えるでしょう。



鹿児島の大名庭園・仙巖園にある尚古集成館、集成館事業の機械工場で世界遺産の構成資産となっている



『withコロナ時代』の アウトドアツーリズム オンラインセミナー

全2回

『withコロナ時代』の アウトドアツーリズム・あり方セミナー

withコロナ時代にはアウトドアツーリズム市場が着実に拡大する。そう期待させる報告が相次いだ。本セミナーは、「北海道エコ・モビリティ研究会」の事業として8月に2回にわたって開催されました。スイス、英国、シンガポールのエキスパートを含む話題提供とディスカッションでの主な発言をご紹介します。[2020年8月3・19日、主催:dec、共催:NPO法人日本風景街道コミュニティ]

★ルーカス・スタッドテール氏:スイス・モビリティ財団 ★ロブ・トムソン氏:The Hokkaido Wilds
★小川 浩一郎氏:(株)THE-O(ジオ)/フットパス・ネットワーク北海道(FNH) ★松澤 直紀氏:支笏ガイドハウス かのあ
★原文宏:(一社)北海道開発技術センター

話題提供

(※スタッドテール氏は事前のオンライン取材の動画放映)

■ルーカス・スタッドテール氏:スイスの旅行業界は3~5月にコロナ禍による深刻な打撃を受けましたが、サイクリング、ハイキングを楽しむ人は増加しました。動力装置を使わないツーリズムのネットワークである当財団のHPや各種関連媒体へのアクセス数は、この半年、前年比65%増。今後の活動の回復、進展を楽観的に見ています。北海道のインバウンド観光の再開は先になるでしょうが、それに備えて情報システムや標識、ルール連携などインフラ整備を進めることが重要だと思います。

■ロブ・トムソン氏:欧米の愛好者を主対象に北海道のアウトドア情報を英語でウェブ発信しています。北海道は自然、アクティビティ、文化の3要素が揃うアドベンチャートラベルの最適地。ただ、ガイド利用率の低い欧米の旅行者にとって英語のアウトドア情報が少ないことがネックです。また、登山道の木道や標識などアウトドアの設備

面の維持が不十分であることは母国ニュージーランドと比較して痛感します。誰でも無料でデリケートな自然環境にアクセスできる時代ではなくなっていることを考えていくべきでしょう。

ディスカッション

■小川浩一郎氏:歩くことに特化したイベント開催やフットパスを取り入れた地域づくりに取り組んでいます。4~5月は収入ゼロの厳しい状況でしたが、6月に「新型コロナ対応フットパス」を札幌市内9カ所で開催。以来、申込みや問い合わせは増え、ニーズの高まりを実感しています。感染対策も徐々に工夫を重ねてきました。歩く人にとって日本は案内サインとマップが不足。インバウンドが戻るころには歩きやすい環境を整えたいものです。

■松澤直紀氏:支笏湖でカヌーのガイドをしています。コロナ禍で一時、落ち込んだもののキャンプなど野外の良さを再認識した人は増え、7月開催の道民割のカヌー体験は盛況でした。安価な初心者向けと高額な経験者向けの両極のプログラムの申込みが多

く、今後、この傾向を踏まえて講習など行いたい。課題は初心者増加で事故のリスクが高まること。フィールド側の整備が必要です。感染対策は2m以上程度離れるキープディスタンス以外、具体的なルールづくりは難しく、臨機応変に対応する部分もあります。

■ロブ・トムソン氏:コロナ禍でインバウンドはゼロですが、Hokkaido Wildsのインスタグラムやフェイスブックのフォロワーの反応や投稿は増加傾向です。つまり、日本にきたい潜在的なアウトドア愛好者は多い。コンテンツ充実を図って発信し続ける好機です。カナダでもカヌーのパドル生産が追いつかない様子。アウトドアが見直されているのです。

■原文宏(進行):話題提供のお二人を含め、みなさんのお話から、withコロナの状況のなかでアウトドアツーリズムのマーケットの拡大を強く感じました。中長期的な視点できちんとした情報を国内外に発信し続けること、また、プロモーションばかりでなく、受け入れ側の設備などのハード面、ソフト面の整備が重要だと再認識しました。

Seminar 02

話題提供

(※事前のオンライン取材の動画放映)

■アンドリュー・ストロー氏:当社は英国最大のサイクリング・ツアー会社で世界各国でツアーを催行してきました。コロナ禍でツアー会社としては死に体でしたが、国内のサイクリストは増加。間もなく少人数のセルフガイドツアーから再開予定です。自転車は20mの車間距離が政府の推奨ルールですが、現実には遵守できない場面も多いです。国外では各国の感染対策への対応が必須ですが、重要なことは顧客に事前情報を豊富に伝えておくこと。日本は各種ルールが整い、安全な国だと認識しています。

■ロウ・テック・ウィー氏:シンガポールの現在の規制では5名以上のグループでサイクリングできないが、マスクは不要です。ソーシャルディスタンスには注意が必要で罰金を科せられることもあります。当社の顧客ニーズに変化はありませんが、感染対策の観点からホテルの選択は重要です。北海道でのツアーが可能になれば、難易度などを含むルート情報、感染対策の徹底度がわかるホテルの情報、飲食店や地元特産品、サイクルショップに関する情報がほしいですね。

ディスカッション

■西田恵理子氏:当協会ではコロナ禍の取り組みとしてサイトを通じた「感染しない、させないサイクリング」の提言活動やガイド、インストラクター対象のオンラインセミナーを実施しました。Withコロナの課題は世界的移動制限と多人数ツアーの困難さ。このため国内需要を喚起し、多様なツアー形態の導入で採算性を模索する必要があります。国内のサイクリスト観光を充実させる好機とも言え、地元密着の取り組みが求められます。オンライン会議普及により広域の地域間連携や関連業界のコラボの進展を期待したい。

■加藤正美氏:自然豊かな道北の中川町で活動してきました。6月にwithコロナのサイクリングを検討するため、日本サイクリングガイド協会のガイドラインを参考にイベントを実施。3密を避けるため、4ルートを用意し、10数名をスキル別に4班に分けて時間差で走行しました。参加者から特に不満は出ず、従来と変わらず走れた様子です。町の観光協会は「ナカガワ割」というアウトドア体験付き宿泊プランを販売し、コロナ禍を前向きにとらえてビジネスに生かそうとしています。

■ロブ・トムソン氏:The Hokkaido Wildsの近年のサイトアクセス数ではスキーツアーが1位で、2位が自転車。自転車を持参する外国人サイクリストにとっては冒険的な長距離ルートが魅力であり、そうした旅には宿泊や温泉の情報が必要です。海外旅行が解禁になったときに備えてウェブ情報の充実を図ることが重要だと思っています。

■原文宏:コロナ禍で自転車に乗る人は世界的に増加していますが、それをどうツーリズムに持っていくかが今後の課題です。また、アウトドアのアクティビティと公共交通がシームレスにつながるものが愛好者の裾野を広げることになるでしょう。感染対策では、地域が安心して旅行者を受け入れるためのインナープロモーションも必要では。

■高橋清氏(進行):今日のお話から、コロナ終息後にツーリズムが爆発的に活発化したときのために、情報の蓄積など今から備えておくべきものを考えることが大事だと感じました。手探りの状態ですが、今、しっかり備えることで次の時代に対応できればと思います。

文責:dec